

カントにおける自己意識の問題

——統覚の作用からの考察——

尾崎 賛美

Kant's Self-Consciousness: A Study from the Act of Apperception

Sambi OZAKI

Abstract

This research considers issues of self-consciousness within the philosophy of Immanuel Kant (1724-1804). Self-consciousness generally involves the following difficulty: the subject of consciousness that conducts its own self-consciousness can not be grasped. This is considered to be one of the most significant problems in his primary work, *Critique of Pure Reason* as well. Regarding this problem, there has been a critique against Kant. When the subject of consciousness attempts to grasp its self in self-consciousness, there unavoidably has to be the very same self as a premise. This criticism comes from the standpoint that Kant understands self-consciousness to be a reflective consciousness that is thrown from meta-viewpoint.

Based on this argument, this research primarily examines the Kantian interpretation of the issue of self-consciousness and seeks to respond to this criticism. Subsequently, this research intends to discuss a substantial matter of self-consciousness representing what it means to have the very consciousness of "I." Regarding the discussion of Kantian self-consciousness, it is inevitable to consider the relevance of Apperception. In particular, by focusing on the act of the Apperception, this paper will demonstrate that the subject of consciousness becomes aware of its existence at the very moment when Apperception is enacted. This existence-consciousness of the self is exactly what Kant has in mind when he refers to self-consciousness.

Furthermore, this consciousness should be regarded as a "sensation of the self." In other words, it is the feeling of existence of which the subject of consciousness is aware. At this point, the true worth of the argument of Kantian self-consciousness, that grasps the self of self-consciousness not as an explicit but as an implicit object, more precisely as a feeling of the self, will be discovered.

はじめに

「私とはだれか」という問いに対し、自分自身を経験的に規定するということは、日常生活においてもごくありふれた事象である。例えば「私は昨日、〇〇に行った」というように、過去の出来事を様々に思い起こし、それらを自らについての説明として使用できる。

ところが、「私とは…」と反省的に自分自身について思いを巡らせているところの、当の意識主観で

あるところの私とは何か。このように、自己意識において自らの自我を問う営みに際しては、その自明性が失われるように思われる。というのもこのような問いには次のような困難さが伴っているからである。すなわち、意識主観であるところの私自身を捉えようとする試みは、常に無限後退に陥ってしまうという困難さである⁽¹⁾。「私とは…」と思惟する意識主観（私）を自らの意識によって捉えようとしたその瞬間から、この試みを意識しているところのより高次の意識主観に気付く。そのためまた、この新

たに出てきた意識主観を捉えようとするのだが、その時にはまたしても…と、この試みは延々と繰り返されていく。

このような自己意識の問題に関しては、カントの名著『純粹理性批判』においても議論されている⁽²⁾。その議論の中でカントは上述した困難さを、意識主観を捉えようとする試みにつきまとう「不都合さ Unbequemlichkeit」として言及している (A346/B404)。こうした事情を踏まえつつ、本稿ではこのような自己意識の意識主観 (自我) がいかにして解釈され得るかということについて、カントの議論に則しつつ検討していく。また、本稿がとりわけ中心的な問題として扱うのは、カントにおいて自己意識の主観であるところの私が、一方ではその論理的な性格においてしか理解され得ないとされるにもかかわらず、他方ではこの私が現に存在する何かとして意識されると語られている事態である。あくまでも論理的な身分に過ぎない私に対し、いかにしてその存在意識が語られ得るのかという、こうした両者の間の緊張関係こそ、カントにおける自己意識論の核心的な問題である。そこで本稿では、たとえ明示的には捉えられなくとも、なお自己自身に対して直接的に現れてくるところの、「自己」という意識が在るとはいかなることであるのかという観点から考察を行う。

ところで、カント哲学において自己意識を論じる際、「統覚 Apperzeption」という概念が非常に重要な位置を占める⁽³⁾。その主な理由は、この「統覚」という概念が文字通り「自己意識」という言葉でしばしば言い換えられる概念だからである (vgl. A49/B68, A107f., A117 Anm., B132)。そこで予めこの自己意識という概念について一点指摘しておく。すなわち、「統覚」との連関で語られる自己意識の意識主観は、かつて Henrich が「自己意識の反省理論 reflection theory of self-consciousness (以下、「反省理論」と略記)」という名の下でカントを批判した⁽⁴⁾ところの、反省的に意識されるような自我とは異なるという点である。彼の批判においてカントが想定したとされる自己意識の主観とは、反省的に自己へと向かうその意識において、予め前提とされなければならないような自我である (第3節にて詳述する)。しかしこれはカントが本来意図していた自己意識の意識主観とは異なるものであり、この点については既に Allison、Ameriks、Sturma といった

論者らによっても度々反論が加えられてきた。とりわけ Allison は、Henrich 的な意味での自己意識を「second-order な自己意識」と呼ぶ一方で、カントが意図したとされる自己意識を「first-order な自己意識」とし、両者を明確に区別しているが、この区別が本稿でも重要な意味をなす⁽⁵⁾ (第3節および第4節参照)。

では、カント自身が本来意図していたところの自己意識とはいかなるものか。この点を切り出す際、注目に資するのが「統覚」の「自発性の作用 Actus der Spontaneität」である (B132)。第1節にて詳しく扱うが、最後にこの作用について簡潔に示しておく。この作用とは、感性の直観において諸表象の多様が与えられた際、それらを総合的に統一し、一であり同一なる経験主観の自己意識の下へと帰属させる作用である。カントはこの作用を、経験の可能性における不可欠な制約として位置づけている⁽⁶⁾。そしてまさにこの「統覚」が作用する際にこそ、経験主観としての私の現存在が意識されると語られる (vgl. B157, B420)。それゆえ「統覚」のこの作用は、本稿の考察において重要な鍵となる。

第1節 経験の成立過程における「統覚」の働きと(「統覚」としての)私の性格について

本稿の掲げる課題の考察に先立ち、経験の成立過程において「統覚」がどのようにして関与するかを確認しておこう。またこれを通じて「統覚」としての私の性格を、次節と併せて明らかにしていく。

そもそも経験とは“何かの経験”であり、経験が経験たり得るには経験の「素材 Stoff」(vgl. A49/B67) が与えられなければならない⁽⁷⁾。経験の素材とは、感性が外的に触発されることを介し、その直観において受容される諸表象の多様である。ただしこの素材はそのままでは未だ秩序付けられた経験を成立させることができず、そのためには同時に悟性の側からカテゴリーが適用されなければならない。悟性とは、直観における諸表象の多様にカテゴリーを適用させることで、それらをひとつの表象 (概念) の下に包摂する能力である⁽⁸⁾。カテゴリーは、直観における多様のように外部から受容されるものではなく、むしろ、経験主観の側から自発的にもたらされるものである (vgl. A125)。それゆえ悟性は感性の「受容性 Receptivität」と協働して経験を成立さ

せるところの「思惟の自発性」の能力として位置づけられる (A68/ B93)。

ところで、この「思惟の自発性」は、経験の可能性の条件として、諸表象に「伴い得ねばならない」とされるところの「統覚」の「自発性の作用」と関係している (B132)⁽⁹⁾。「統覚」のこの作用は“*Ich denke*”と表象される働きである。この働きを通して、外部からもたらされた諸表象には経験主観の意識との関係性が与えられる。それにより諸表象には「私にとって何ものでもない」のではない *not* “*nothing to me*” という性質が、換言すれば、私にとって“意味な”経験を構成する資格が付与されることになる⁽¹⁰⁾。先述した通り「統覚」は自己意識としてみなされる概念であることから、以下では経験の成立と自己意識との関係に着目し、さらに掘り下げていく。

第一に、直観において与えられるところの「あらゆる諸表象は可能的な経験的意識との必然的連関を有す」とされる (A117 Anm.)⁽¹¹⁾。つまり、いかなる表象であっても、それらが私の経験において“意味なもの”となり得るためには、経験的意識との関わりがなくてはならない⁽¹²⁾。ところが第二に、「すべての経験的意識は超越論的意識との必然的連関を有す」とも言われている (A117 Anm.)。その理由は「様々な諸表象に伴う経験的意識」もまた「それ自体ではとりとめもない *zerstreut*」ものだからである (B133)。それゆえ、個々の経験的意識もまた、「統覚」により総合的に統一されることを通じて、一であり同一なる経験主観の自己意識の下に帰属しなければならないのである。

経験が経験たり得るには、それを経験しているところの経験主観およびその自己意識が当然ながら想定されなければならない。このような経験の可能性の条件として必然的に要請される経験主観の自己意識こそが「超越論的意識」という表現の意味するところである⁽¹³⁾。付言すると、この意識の主観は「私」(「統覚」としての)として表示される。

なおここでの重要な点は、この意味における私とは、個別具体的な人格を意味するのではなく、経験の可能性の条件として論理的に要請される概念に過ぎないということである。Powell も指摘する通り、このような超越論的な意味での私とは「経験的判断の論理的主観 [傍点引用者]」にすぎないのである⁽¹⁴⁾。

第2節 私の論理的性格とカント哲学における意識主観の捉え難さ

以下では、前節で導出された「統覚」としての私の論理的な性格に関して詳述していく⁽¹⁵⁾。このことを通じ、カントにおいて「私」という概念が、いかに特殊な概念として位置づけられているかが明確になる。同時にまたここから、自己意識の主観としての私の捉え難さが浮き彫りになる。

まず、「統覚」としての私が論理的な主観に過ぎないとされる理由を端的に示すと以下の通りである。すなわち、この私が“*Ich denke*”という「思惟の形式」において、常にその「主語の位置 *Subjektstelle*」で必然的に使用されなければならないからである⁽¹⁶⁾。感性において受容された諸表象の多様性に対してカテゴリーを適用するためは、「カテゴリーの乗り物 *Vehikel*」(vgl. A348, B406)とされるところの“*Ich denke*”が必然的に用いられなければならない。というのも対象認識(判断)は、“*Ich denke*”という思惟の形式でもって常に行わなければならないからである。それゆえ、この思惟の形式における主語としての私も同様に、その論理的必然性から要請される概念に過ぎないのである。

加えてまた、この私(自我)という概念に対しては、それに対応するような内容が直観において一切与えられないとされる (vgl. B135, B278, A355)。直観において与えられる多様を欠く以上、「統覚」としての私は、何ら実在するものとして認識され得る資格をもたない。それゆえ、この私とは「内容のまったく空虚な表象にほかならない自我」(A346/ B404)とされる。『プロレゴメナ』においてもカントは、このような論理的な意味における私という語を単なる「指標辞 *Bezeichnung*」(Ak. IV. S.334)に過ぎないものとしている。

したがって「統覚」としての私とは、自己認識の対象として具体的に規定される私ではない。カントは自己を意識することと、自己を認識することとを明確に区別する (vgl. B158)。私自身が個別具体的な人格として認識され得るためには、内的感官において、その形式であるところの時間に則したかたちで、私自身の具体的な規定内容が与えられなければならないのである (vgl. B157 Anm., B158)⁽¹⁷⁾。

またこれは、「パラロギスムス章」において合理的心理学が企図したとされるような、実体的靈魂と

しての私でもない。本稿では詳しく扱えないが、この合理的心理学の試みはカントによって「誤謬推論」(vgl. A402)とみなされることになる⁽¹⁸⁾。合理的心理学は「統覚」としての私を、カテゴリーの適用可能な対象としてみなそうとすることで、実体的な霊魂としての自我を捉えようと試みた。繰り返しになるが、この自我(私)とは、認識対象として認識されるべき内容を欠くことから、本来はカテゴリーが適用され得る対象ではない。それどころかむしろ、この私とはカテゴリーの使用の根拠とされる(vgl. A401f.)。つまりこの私とはあくまでも、我々がカテゴリーを用いて何らかの判断を行うに際し必然的に要請される、判断の際の意識形式の主語なのである。したがって、上述してきたような理由から、自己意識の主観であるところの私とは、Rosefeldtが的確に指摘する通り、決して「実在的な主観 reales Subjekt」としては捉えられ得ず、「論理的な主観 logisches Subjekt」として理解されるに過ぎないのである⁽¹⁹⁾。

ここまで見てきたように、「統覚」としての私、すなわち自己意識における意識主観は、経験の可能性の論理的必然性から要請される概念として理解される。それゆえこれを何か実在的な事物として捉えようとする試みは、カントにおいては決して容認され得ない。

これに加え、さらに困難さを増す重要な点は、「統覚」の活動性という性質にある。経験の成立過程において「統覚」は“諸表象に伴う”根源的な作用とされる。「純粹統覚」あるいは「根源的統覚」は、認識を成立させる働きとして、諸表象に必然的に伴い得ることができなければならないところの根源的な自己意識である。しかし他方、「統覚」それ自身はそれ以上の何かによって伴われることはないとされる(vgl. B132)。この点にこそ、「統覚」が根源的な自己意識とされる所以がある⁽²⁰⁾。「統覚」は常に、働きの側において認識の成立に関与する。そしてこの活動性のゆえにこそ、当の認識活動の営みを通じてこの活動性を捉えようとする試みは、当の目的としていたところのものを捉えようとしたその瞬間、それが既に手中からすり抜けてしまっているという事態に直面するのである⁽²¹⁾。この事態こそ、本稿の冒頭で言及した無限後退という事態の内実である。

このような自己意識の主観を巡る試みに伴う困難

さを十分に理解していたカントは、このことについて以下のように言及する。すなわち、自己意識の主観であるところの私、厳密には私という「指標辞」の背後にある意識主観については、「超越論的主観 = X」としてしか表現することができず、我々はこれを決して知り得ることはない(A346/B404)。

それにもかかわらず、「統覚」の「自発性の作用」を通じて私の存在が意識されると語られる⁽²²⁾。このことはいかにして理解されるべきであろうか。「自発性」という言葉は「自己活動性 Selbsttätigkeit」としても理解される⁽²³⁾。この活動性における「自己」、すなわち自己意識における意識主観(私)は、その論理的な性格において理解されるものであった。とはいえ、この作用が現に経験を構成する働きとして機能する以上、そして我々が現に経験を体験している以上、この作用における「自己」は、何らか現実的なものとして語られ得るのではなかろうか。無論、この「自発性の作用」の起点として何らか実体的な自我を想定すれば、それは合理的心理学が企図した試みと同じ轍を踏むことになるため、これとは別の方法で解決の糸口を見出さなければならぬ。

それでは以上のように、自己意識の主観であるところの私を語るに際し大きな制約が課されていることを確認したいま、カントの意図する私の存在はいかにして理解され得るだろうか。次節ではまず、Henrichの「反省理論」において批判された、カントが想定したとされるところの自己意識解釈を簡潔に確認する。次いで、カント自身が展開した「私の存在意識」に関する議論を見届ける。このことにより、カントが本来意図したところの自己意識に関する見解がより対照的に示されるであろう。

第3節 Henrichの「反省理論」とカントの意図した自己意識

それではまず、Henrichによって提唱された「反省理論」の大枠を確認していこう。彼の主な指摘は、カントの議論において自己意識が語られる際、「自己意識が意識の主観に帰する」ものとして説明されている点にある⁽²⁴⁾。Henrichの主張を端的に示すと、以下の通りである。すなわち、反省を通じて自己を意識しようとする自己意識の営みにおいては、その遂行の果てに捉えられるはずであった自我が暗黙裡に想定されている。そのため反省的に自己を意識し

ようとする際には、その意識において、意識遂行者であるところの自我と同一の自我が常に前提されていなければならない。したがって、反省的な自己意識活動は、「自発的な作用を開始することのできる自我を前提している」のである。これを論点先取のかつ循環的な事象であるとしたのが Henrich による批判である⁽²⁵⁾。

この Henrich による指摘に対しては以下のような観点から応じ得よう。第一に、反省的意識によって客観化される自我は、カントにおいて、自己認識の対象として語られる経験的自我であり、これは「統覚」としての自己意識における意識主観（自我）ではない。というのも、「統覚」の「自発性の作用」において意識される意識主観は、決して認識対象であるところの現象ではないとされているからである (vgl. B157)。第二に、「統覚」としての自己意識において、カントは自我を前提してはいない。というのも、カント自身、意識主観を反省的に捉えようとする試みは常に無限後退に陥ってしまう点を明確に認識していたからである。自我を反省的に捉えようとする試みがカント自身において行われていない以上、そこにおいて前提されていると指摘される自我も、カント自身においては想定されていない。それゆえ、仮にカントが Henrich によって指摘されたような自己意識の構造を想定していたのであれば、Henrich の批判は適切であったであろう。しかし、このような想定はカント自身によっても決して容認されないのである。

またこの点に関して Ameriks は興味深い反論を Henrich に対して行っている。Ameriks の分析によれば、Henrich の批判はカント以前の「伝統的で非カント的な諸理論 non-Kantian theories」に対しては適切なものであったとされている⁽²⁶⁾。その理論では、自らの経験についてそれが自らの経験であると同定できるためには、「客観的な基準あるいは指標」が前提として要請される。となれば、この要請された基準は何をもって自己の同一性を担保するのか。ここでその担保となる基準を自己自身によって補おうした途端、かの「反省理論」による批判が息を吹き返してくる。この分析を詳しく説明すれば以下の通りである、すなわち「私は X を経験している」と反省的に思考する際、これを敢えて記述するならば「私は X を経験している、と私は考える」という構造になる。しかし、この X を経験していると

ころの私と、このこと自体を思考している私との同一性を担保する客観的な基準を想定した場合、今度はその基準の同一性が妥当であることを担保する別の基準が想定されなければならない。しかしここに、この同一性の基準として自己自身をもってくることは許されない。というのも「それでは何故、私はそもそもこの同一性を知っているのか」という問いには、論点を先取するかたちでしか答えられないからである。それゆえ、Ameriks がいうところのカント以前の諸理論は、自己の同一性の基準を巡って無限後退に陥るか、論点先取の過ちを犯すかという二者択一を余儀なくされるのであり、その限りにおいて Henrich の「反省理論」による批判は的を射ているのである。

加えてまた Ameriks は、カントに対してなされた Henrich のこのような批判の理由を分析している。それは、我々が自らの諸々の意識に対して「認識的に接近する get cognitive access」際、それらの意識を自らの意識として理解するためにはそもそも、その意識の主観であるところの我々がまずもって「反省的に客観化」され、捉えられなければならないと考えられたからである⁽²⁷⁾。たしかに「自己意識についてはメタ的な視点からのみ語り得る」と主張する立場、Allison の用語に則して換言すれば、自己意識を「second-order な自己意識」として解釈する立場に対しては、Henrich の批判も妥当性を有す。しかしながら、以下で示すように、カントが本来意図していたところの自己意識とは「first-order な自己意識」である。後者のように解釈される自己意識においては、「second-order な自己意識」解釈の立場ならば想定したであろう、反省的な意識対象としての自己が明示的に現れることはない。そしてこの点こそカントの自己意識論解釈において重要な鍵となる。

以上の議論を踏まえ以下では、カントが本来意図したところの自己意識とはいかなるものであるのかをみていこう。とりわけここでは「統覚」の作用において、「私が存在する ich bin」として意識される局面がどのように描かれているかを確認し、この存在意識と自己意識との関係を吟味していく。

統覚の総合的で根源的な統一において [...] 私が自分自身を意識するのは、私が自分自身に対して現象する通りに wie ich mir erscheine 意識

するのでもなければ、私が私自体である通りに wie ich an mir selbst bin 意識するのでもなく、単に私が存在すること nur daß ich bin を意識する。(B157)

この引用から明らかなように、「存在する」として意識される私は、現象としても⁽²⁸⁾、物自体としても⁽²⁹⁾、みなされていない。そして直後の箇所において、この意識は「思惟 Denken」であるといわれるように (ebd.)、上で示された「私が存在する」という意識は、それ自身「統覚」の「自発性の作用」において意識される私の存在意識なのである。そしてこの意味でこの私とは、河村が指摘する通り、「経験に基づくのではなく、経験に先立ち、経験を可能にする主観の活動性のうちに […] 自覚されるような『私』」なのである⁽³⁰⁾。

この「統覚」の「自発性の作用」とは、感性の直観において諸表象が与えられることを契機として機能する働きである⁽³¹⁾。これは「私は思考しつつ実在する ich existiere denkend」(B420, B429) というカント自身の言葉が示すように、何らかの思考対象が与えられ、それをまさに思考する際に意識されるところの、思考における意識主観の存在意識である。「統覚」の作用であるところの“Ich denke”とは、「思惟」としては単なる「論理的機能」であるに過ぎず (B429)、それ自体では「私が存在する」という意識は与えられない。そうではなく、感性において諸表象の多様が与えられ、それらを総合的に統一しようとする際にはじめて、この機能は「経験的命題」(B423 Anm.) として、経験主観の現存在を同時に示すとされる (vgl. B429)⁽³²⁾。この「経験的命題」こそが「私は思考しつつ実在する」という事態を表すのである。

ところで、この命題において示される私の存在は「無規定的な知覚 unbestimmte Wahrnehmung」といわれる (B423 Anm.)⁽³³⁾。同時にまたこれは、「現象」でもなく「事物それ自体 (ヌーメノン) Sache an sich selbst (Noumenon)」でもなく「単に実在する何か nur etwas Reales」であるとされる (ebd.)。

以上から帰結されることは、「私が存在する」という意識が、「統覚」の作用に際し現れるということである。さらに、この私の存在意識は「無規定的」にはあるが、しかし「何らか実在的なもの」として「知覚」されるということも示された⁽³⁴⁾。当然「私

の存在意識」とは、明確な客観として現象するものではないため、いかなる規定可能性の余地も残されてはいない。しかしながらそれでも、この「無規定的な知覚」は、私が思考するに際し (したがって「統覚」が作用するに際し)、現に直接的に実感される存在意識である。このように感じられる意識こそ、カントが本来意図していたところの自己 (の存在) 意識である。より厳密に示せばこれは、思惟において「現に存在する」として意識される「おのれ」という感じであるともいえよう⁽³⁵⁾。

次節では、この自己 (の存在) 意識において、「現に存在する」として意識される「自己」に焦点を絞りさらに検討していく。これは「私」という「指標辞」によって示されるところの、「おのれ」という感じの考察に関わる。その際、先の「反省理論」への反論として導入された Ameriks および Sturma それぞれの概念装置を参照しつつ議論を展開していくこととする⁽³⁶⁾。

第4節 自己意識における意識主観としての私(自己)はいかにして理解されるか

まず Ameriks であるが、彼は自己意識の内において「様々な段階」が見出されるべきであると主張する⁽³⁷⁾。そして、自分自身の思惟についての思惟として「超越論的レベルでの Ich denke」を明示的な自己意識とする一方、個々の経験的「first-level の思惟」を非明示的な implicit 自己意識とする⁽³⁸⁾。

先述したとおり、経験主観にとって有意味な経験が構成されるためには、諸表象に“Ich denke”が伴うことで、「私にとっては何ものでもない」のではない」という性質が与えられなければならない。Ameriks によると、この「私にとって」という「私的性質 personal quality」をもたらずの「first-level の思惟」である⁽³⁹⁾。

この「first-level の思惟」は別の箇所においてまた「(自己) 意識 (self) -consciousness」として表現される⁽⁴⁰⁾。Ameriks はこの「(自己)」という表現によって、Henrich が想定したような自己意識とは区別される非明示的な自己意識を示そうと企図する。この「(自己)」は反省を介して明示的に意識される客観化された「自己」ではない。Ameriks にとってはむしろ、この「(自己)」の非明示的な性格こそが決定的に重要なのである。「(自己)」は、その非明示的な性格ゆえにこそ、いかなる客観化も介する

ことなく、自らの意識において「直接的そして不可謬的 immediately and infallibly」に与えられる⁽⁴¹⁾。これは思惟において、その意識の「主観が存在するという還元し得ない irreducible 事実」⁽⁴²⁾からもたらされる「自己性 selfness」⁽⁴³⁾であるとされる。それゆえ、諸表象に伴う“私の”という「私的性質」は、まさに思惟の意識において直接的に与えられるような、(思惟主観であるところの) 私が存在するという意識としての「自己性」であると言えよう。

このような観点を別の方途で強調したのが Sturma であった。Ameriks の「(自己) 意識」に対応する装置として Sturma が提唱したのが自己意識における「準客観 Quasiobjekt」としての「自己」という概念である⁽⁴⁴⁾。彼はこの概念により、自己意識において非明示的ではあれ意識される、自己自身の「直接的で指標的な意味 unmittelbarer referentieller Sinn」を表現した⁽⁴⁵⁾。これはまた、自己意識における「自己意識の相関者 Korrelat des Selbstbewußtseins」として機能する概念とされる⁽⁴⁶⁾。この「相関者」は、自己意識において、その意識の主観であるところの自己を、通常の意味での客観としてではないが、それでもなお自らの意識において直接的に与えられる「何か」として示す⁽⁴⁷⁾。

後続する箇所において、この「準客観」という概念は「自己意識に内在的な思惟する主観の自己確実性 Selbstgewißheit」として、思惟主観を不可謬的に示すとされる⁽⁴⁸⁾。重要なのは、この「準客観」という概念が「いかなる述語的規定からも無関係」に思惟主観を示すとされる点である⁽⁴⁹⁾。というのも、先述した通り「統覚」としての自我はその性格上いかなる述語規定も受けないからであり、同時にまた、そこで「存在する」と意識される私の存在意識も「無規定的」にしか知覚されないからである。しかしそれでもなお、ある種の客観のようにして、自らの意識において現れてくる「おのれ」という感じを示そうとする点がこの概念の狙いである。

以上のような概念装置を用いることで最終的に Sturma は「カントが自己意識において表現していることは、自らの活動性すなわち自発性 Aktualität bzw. Spontaneität における、思惟主観自らについての von sich 意識であり、これ〔この“自ら”〕に関しては理論上、自己意識の準客観が代わりを務める eintreten」と結論付ける⁽⁵⁰⁾。

以上のように、Sturma も Ameriks と同様、自己

意識における「自己」を、その独自の概念を用いることで表現した。重要なのは、この「自己」が、Henrich が示したような、反省的に客観化される明示的な「自己」ではないという点である。むしろこの「自己」とは「統覚」が作用する際に「存在する」として意識されるところの何かであり、これはその論理的性格上、「私」という「指標辞」によって表現されるところのものであった。

とはいえ、それでもなおこの自己意識における意識主観としての「自己」を理解しようとするとき、前節でみてきた「(自己) 意識」における「(自己)」あるいは「準客観」という概念はある重要な点を示唆してくれる。それは、自己意識において「存在する」と意識される意識主観の「自己」は、非明示的な「準客観」として意識されるということである。この非明示的な性質ゆえにこそ、意識主観は「自己」を直接的に意識するのである。この「自己」とは、Ameriks の言葉を借りれば「自己性」である。この「自己性」を筆者は、前節の末尾にて言及したように、「おのれ」という感じとして解釈する。以下では本稿の結びに代え、ここまで明らかにしてきた点を整理し、本稿の最終的な結論として、今しがた示した「おのれ」という感じに関する説明をおこなう。

おわりに

本稿は、自己意識において「存在する」として意識される意識主観をいかにして解釈するかという問いの下、考察を行ってきた。第 1 節および第 2 節では、「私」という語が、カントにおいては、たんなる「指標辞」でしかなく、それゆえ「私」は思惟の形式における論理的な主観としてしか理解され得ない点を明らかにした。しかしその一方で第 3 節では、「統覚」が経験を構成するために作用する際、意識主観は自らを「実在する何か」として知覚することを指摘した。この知覚(存在意識)こそがカントが本来意図した「first-order な自己意識」である。これを踏まえ第 4 節では、このような自己意識が非明示的な「(自己) 意識」であり、その際に意識される「自己」とは「準客観」として解釈されるという点を明らかにした。この「準客観」において示されるのは、反省的に捉えられたものとして自己ではなく、「統覚」が作用する際、存在するとして知覚される「何か」である。これこそが「私」という語の指標する内実であり、Ameriks はこれを「自己性」として表

した。そして筆者はこれを「おのれ」という感じとして解釈する。

この解釈は、『プロレゴメナ』でしばしば引用される箇所において、「私」という語が「現存在の感情 das Gefühl eines Daseins」を示すと語られる記述に由来する (Ak. IV. S.334 Anm.)。「統覚」の作用に際して意識されたのは、何らかの無規定的な知覚であった。これは具体的に規定された対象の知覚ではなく、ただ存在するとして意識される (意識主観自らの) 実在性の知覚である。筆者はこの知覚を「おのれ」という感じとして捉え、先の「現存在の感情」に対応するものとして解釈する。したがって、自己意識における「自己」がその内実として含むのは、何らかの対象意識ではなく、実在性の無規定的な知覚すなわち存在感情であるという点が、本稿の最終的な結論である。それゆえカントが本来意図した意味での自己意識とは、「統覚」が作用する際に、直接的・不可謬的・非還元的に「存在する」として意識されるところの存在感情であるとして本稿は結論付ける。

注

- (1) ここで本稿の表記に関し二点指摘をしておく。第一に、本稿はカントの主著『純粹理性批判』を中心に考察を行う。その際、本著作からの引用については、慣例に従い「第一版」(1781)をA、「第二版」(1787)をBと表記しその後には頁数を添える。引用文への傍点はカントによる強調であり、地の文への傍点は筆者自身による強調である。また特に断りが無い限り、引用文における〔 〕による挿入と [] による中略とは引用者によるものである。本稿で使用したテキストは以下の通りである。Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag GmbH, 1998. なお、訳出に際しては理想社版『カント全集』第4、5巻 (1966)、第6巻 (1973)を参考にした。また、『純粹理性批判』以外の著作に関しては、アカデミー版『カント全集』の巻数 (略記号 Ak. +ローマ数字) に頁数 (算用数字) を添えて示す。第二に、ここでの「私」という表記に関して、本稿ではこれを以下の意味において用いる。まずこの「私」は、特定の具体的な人格を意味するものではない。第1節において詳しく扱うが、この「私」とはしばしば「統覚」という概念と互換性をもつ概念であり、「自我 das Ich」とも言い換えられる概念である (vgl. A400, B407)。次いで、この意味での「私」とは、経験の成立の可能性において、その論理的必然性から要請された「論理的主観 logisches Ich」(vgl. B350)である。本稿ではこのような意味における「私」を、「統覚」としての「私」と位置づけ使用することとする。
- (2) 例えば Hanssen が指摘するように、カント自身はいわゆる自我論や心の哲学を主題的に発展させたわけではない。しかし、「純粹悟性概念の演繹 (以下、「演繹論」と

略記) (A95-130/B129-169) や「純粹理性の誤謬推理について (以下、「パラロギスムス章」と略記) (A348-405/B406-432) の議論において、“我々が知り得る”ところの“経験”の領域を画定する取り組みの中で、自己意識 (あるいは自我) に関する独自の見解を展開させたことは明らかである。その独自性の最たる点とは、自我を経験の可能性における絶対的に不可欠な制約として位置づけたところにある。この自我 (「統覚」) それ自身は決して経験され得ず、むしろ経験を成立させる機能として、経験の背後において活動する自己意識である。自己意識を機能として位置づける点こそ、カント自我論の核心部分であると筆者は解釈する。Cf. Camilla Serck-Hanssen, “Kant on Consciousness”, *Psychology and Philosophy: Inquiries into the Soul from Late Scholasticism to Contemporary Thought*, Sara Heinämaa, Martina Reuter eds., Springer Science+Business Media B.V., 2009, p. 139.

- (3) 『純粹理性批判』においては、「超越論的統覚 transzendentale Apperzeption」(A106f.)、「根源的統覚 ursprüngliche Apperzeption」(B132.)、「純粹統覚 reine Apperzeption」(ebd.)、「経験的統覚 empirische Apperzeption (内的感官 innerer Sinn)」(A107) という四種の「統覚」概念が登場する。前の三者は、「経験的統覚」と対置される概念として使用され、それゆえこれらは経験的に与えられ得るような性格をもたず、むしろ経験の可能性の必然的条件として位置づけられている。ところが前三者について、これらを一括して同一視し得るか否かに関しては研究者の中でも意見が分かれている。本稿ではこの種の議論を扱うことができないため、ここでは「経験的統覚」から区別された概念として一括りに「統覚」と表記し、上述したような意味においてこれを使用することとする。
- (4) Cf. Dieter Henrich, “Self-Consciousness, A Critical Introduction to A Theory”, *Man and World 4th vol.*, Martinus Nijhoff, The Hague/Kluwer Academic Publishers, 1971, p. 10f.
- (5) Cf. Henry E. Allison, *Kant's Transcendental Deduction: An Analytical-Historical Commentary*, Oxford University Press, 2015, p. 341. また本稿では扱えないが、Allison と同様の観点から自己意識に関して議論をしている他の研究のひとつとして以下のものを参照。Patricia Kitcher, *Kant's Thinker*, Oxford University Press, 2011, pp. 59-60.
- (6) 本稿が主眼とする問題の性質上、「統覚」の作用については主に主観面における議論を扱っていくことになるが、当然ながらそれと相関するところの客観面における「統覚」の影響も忘れてはならない。特にA版「演繹論」において詳論されているが、「統覚」は「感官」・「構想力」と並んで、経験を成立させる「三つの根本的源泉」(A95/B127) あるいは「主観的な認識源泉」(A115) として位置づけられている。その中でも「統覚の統一」は経験の可能性における「超越論的根拠」とされている (A127)。我々が認識の対象とし得るのは、感性において受容されたままの種々雑多なカオスではなく、概念の下に包摂されることで統一された客観である。しかしこの統一は客観の側から与えられるのではない。むしろ客観面に統一をもたらすのは主観の側における意識の統一である。この主観の側の意識の統一を可能にする働きこそ、「統覚」によるところのものであり (vgl. A123, A125f.)、この統一を通して同時にまた、我々の認識にとって唯一の対象

であるところの現象に客観的实在性が付与される。というのも、所与の諸現象が我々の認識対象となり得るためには、最終的には常に統覚による総合的な統一を介さなければならず、カント哲学においては、このことなくして有意義な経験は可能たり得ないからである。そしてこのような経験のあり方こそが人間に固有な唯一の経験のあり方であり、またいかなる認識主観に対してもこのあり方が妥当するからこそ、我々の認識対象には、あくまでも現象としてではあるが、その客観的实在性が与えられるのである。

- (7) カントにおいて、「経験 Erfahrung」とは「経験的認識 empirische Erkenntnis」を意味する (vgl. B147)。そこで本稿では「認識」という表現を「経験的認識」という意味に限定し、その限りで「経験」と同義のものとして使用する。
- (8) 悟性はこのような働きによって、無秩序的な諸表象の多様に「秩序」と「合法則性」を与えるところの、「規則の能力」として位置づけられている (A125f.)。
- (9) この関係について筆者の見解を簡潔に示す。先に見てきたように、感性における諸表象に統一を与える、すなわちそれら諸表象にカテゴリーを適用しひとつの概念の下に包摂するのは、悟性の能力による思惟の自発的な働きであった。そしてカントはこの思惟に際する意識の形式を“*Ich denke*”として表象されるものとしている。カテゴリーは何もしなくても自動的に適用されるようなものではなく、その適用に際しては「カテゴリーの乗り物 Vehikel」と称されるところの“*Ich denke*” (vgl. A348, B406) を、すなわち経験主観の自己意識 (あくまでもカント的な意味での自己意識) を必要とする。そしてこの“*Ich denke*”という表象こそが「統覚」の「自発性の作用」なのである (B132)。このことから明らかなように、諸表象を概念の下に包摂する悟性の自発的な思惟の能力は、同時に「統覚」の自発的な意識作用でもあると考えられる。
- (10) この言及は Ameriks の指摘に依る。Cf. Karl Ameriks, “Understanding Apperception Today”, *Kant and Contemporary Epistemology*, Paolo Parrini ed., University of Florence, 1994, p. 332f. ; Karl Ameriks, “From Kant to Frank: The Ineliminable Subject”, *The Modern Subject: Conceptions of the Self in Classical German Philosophy*, Karl Ameriks and Dieter Sturma eds., University of New York Press, 1995, p. 225f.
- (11) ここで「可能的」と形容されているのは、あくまでも経験の可能性の根柢を捉えようとする超越論的な観点から語られているからである。経験的意識はそれ自体で経験的意識としてどこかに実在するというわけではない。ここで意図されているのは、あくまでも認識が可能となり得るためには、諸表象と経験的に結びつく意識が可能性として想定されなければならない、ということである。そしてその旨がこの「可能的」という表現において示唆されていると筆者は解釈する。
- (12) カントに従えば、我々にとって認識の対象となり得るのは「現象 Erscheinung」である (vgl. A109)。したがって経験を構成する内容に関しては、感性の直観において、その経験の素材が多様として現象しなければならない。しかし諸現象の一切が我々の認識対象となるのではなく、我々が意識をもって知覚したもののみが経験の構成要素として認識される。カント自身が述べているように、「現

象とは、それが意識と結ばれるときに知覚となる」のである (A120)。以上から、意識と結ばれた現象のみが我々の可能的認識対象とされる、ということが帰結される。またここで、「現象」および「表象」という表現が混同されて使用されているように思われるかもしれない。しかしカント自身「諸現象は感性的表象以外の何ものでもない」 (A104) と述べている。それに従い本稿では感性において受容された諸現象を (感性的) 表象として解釈することとする。

- (13) ここではこの「超越論的意識」が現に存在するか否かということは問題とされない。カントがここで意図しているのは、経験が成立するためには、諸々の経験的意識がそのもとにおいて統一され帰属し得るところの自己意識が論理上想定されなければならないということである。これはカントが「演繹論」において、「権利問題 *quid juris*」を「事実問題 *quid facti*」から峻別する通りである (vgl. A84/ B116f.)。カントが「演繹論」において展開するのはまさに「権利問題」に関わる議論である (ebd.)。それゆえかの意識は経験の可能性の必然的条件として、「超越論的」と形容されるのである。
- (14) Thomas Powell, *Kant's Theory of Self-Consciousness*, Oxford University Press, 1990, p. 61.
- (15) 本稿で直接は引用しないが、この観点から詳しい議論を展開している先行研究のひとつに以下のものがある。Tobias Rosefeldt, *Das logische Ich: Kant über den Gehalt des Begriffes von sich selbst*, Philo Verlagsgesellschaft mbH, Berlin/ Wien, 2000, S. 49-82.
- (16) Vgl. Tobias Rosefeldt, „Wer oder was ist „das stehende und bleibende Ich“?“, *Immanuel Kant: Kritik der Reinen Vernunft*, Hg. Georg Mohr und Marcus Willaschek, Akademie Verlag, Berlin, 1998, S. 440.
- (17) 本稿では自己意識に限定して議論を展開していくため、ここでは自己認識の問題を深く掘り下げることはせず、カントにおいては自己意識と自己認識とがまったく別種のものとして理解されているという点を強調するにとどめる。
- (18) A 版と B 版では、合理的心理学が企図したとされる推論形式、およびカントによるそれへの批判の仕方に若干の相違があるが (vgl. A402, B411f.)、紙幅の都合上この点に関する詳述は別の機会に譲らなければならない。
- (19) Vgl. Rosefeldt, 1998, S. 440. ; vgl. A350.
- (20) この根源的な自己意識であるところの「統覚」に対し、さらに高次の自己意識が伴い得るとすれば、この「統覚」はその根源的な性格を失うだろう。勿論このようなことが仮に想定され得るとすれば、「統覚」としての自己意識、あるいはその主観であるところの私は、何らかのかたちで対象として捉えられ得るのかもしれない。しかしながらこのより高次の自己意識を想定するということは、このより高次の自己意識に対し、それよりもさらに高次の自己意識の想定を許容することになる。そして自己意識を巡る営みは容易に無限後退的な空転に陥ってしまうのである。このことこそ、カントが十分に理解し指摘していた、自己意識の主観を巡る営みに伴う「不都合さ」であった。
- (21) この点は先に「パラロギスムス章」との連関において指摘したことではあるが、何らか対象を捉える営み、すなわち経験認識に際しては、自己意識が (したがって「統

- 覚」が常に用いられなければならないとされる点に通ずる。何らか対象を捉えようとする行為においては「統覚」がその働きとして必然的に用いられなければならないため、この「統覚」を捉えようとする際には、「統覚」自身が既にその試みにおいて捉えようとする側で機能しなければならないのである。この点はカント自身によっても「客観を認識するために前提としなければならないものを、客観として認識することはできない」として強調されている (A402)。
- 22) この「私が存在する」という表現に関して注意すべき重要な点がある。それは「私が存在する (私が在る)」と説明した際、この「存在する (在る)」という述語規定が、外的事物に関して判断を下す際に使用される「～が (そこに) 在る」という述定とは異なるという点である。「私が存在する Ich bin」という言明は別の箇所「私の現存在 mein Dasein」(B157) あるいは「現存 Existenz」(B423 Anm.) と表現される。特にこの「現存」が「いかなるカテゴリーでもない」と語られる点が非常に重要である (ebd.)。外的事物に関して「～が在る」という判断を下す際、この言明は感性の直観において与えられる対象に対しカテゴリーが適用されることでなされる。しかし第一に、先述した通り、「私」は何ら認識され得るような対象ではない。第二に「私が存在する」という言明は、対象認識 (判断) ではなく、単なる「意識」である。後程詳述するが、この「存在する」として意識される私に関して、それがいかなる認識の対象でもない点、そしてそれにもかかわらず「存在する」として意識される点こそが、「私の存在意識」を議論する際に非常に重要な論点となるのである。
- 23) 「自発性」という語の定義に関して筆者が参照したものは以下の通りである。Rudolf Eisler, *Wörterbuch der Philosophischen Begriffe*, Bd.3, E. S. Mittler & Sohn, Berlin, 1930, S. 140f.; Joachim Ritter (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd.9, Schwabe & Co Verlag, Basel / Stuttgart, 1995, S. 1423ff. なお、「自発性」という言葉についてひとつだけ注意点を指摘しておく。ここで言われている「自発性」とは、カントの実践哲学において「自由」という概念との連関で語られる「絶対的自発性」とは区別されるものである。思惟の自発性は、それ自身で単独に作用するのではなく、感性の直観において多様と与えられることを契機として作用するのである。この点は「思惟 Denken に対して素材 Stoff を与えるところの、何らか経験的な表象なくしては我思考すという作用は生じない」とカント自身が主張する通りである (B423 Anm.)。したがって、「思惟の自発性」が語られる際、この自発性は Sellars が指摘する通り、「相対的自発性 *relative spontaneity*」として解釈されるべきである。Cf. Wifrid Sellars, “... This I or He or It (The Thing) which Thinks...”, *Essay in Philosophy and Its History*, Wifrid Sellars ed., D. Reidel Publishing Company, Dordrecht, Holland, 1974, p. 79.
- 24) Henrich, 1971, p. 10f.
- 25) Ibid.
- 26) Karl Ameriks, “Kant and the Self: A Retrospective”, *Figuring the self: subject, absolute, and others in classical German philosophy*, David E. Klemm and Günter Zöllner eds., State University of New York Press, 1997, p. 61f.
- 27) Ameriks, 1997, p. 63.
- 28) この現象としての私こそが、自己認識における対象とされるところの個別具体的な私である。
- 29) この点に関しては直接的には言明されていないものの、この箇所から「存在する」として意識される私が物自体としてもみなされないという点は、例えば Allison によって指摘されている。Cf. Allison, 2015, p. 399.
- 30) 河村克俊「統覚としての『私』: カントの自我論」、『外国語・外国文化研究』、第 15 巻、関西学院大学リポジトリ、2010 年、115 頁。
- 31) 「統覚」の自発性に関しては、本稿註 23 を参照のこと。
- 32) ここで言われている「経験的命題」に関して、本稿では詳しく扱うことができないが、例えば Allison がこの「経験的命題」に関しては適確かつ簡明に言及している。Cf. Allison, 2015, p. 400.
- 33) 当然ながら、この「無規定的な」という形容表現が意識主観に関する何らかの規定を意味するわけではない。この点に関しては Banham が独創的な例でもって言及している。Cf. Gray Banham, “Apperception and Spontaneity”, *Kant Studies Online*, http://www.garybanham.net/PAPERS_files/Apperception%20and%20Spontaneity.pdf, 2008, p. 16.
- 34) この引用箇所における「もの」という表現であるが、これまでの論証からも明らかなおおりの、この表現によって「私の存在意識」が何らか事物的な存在として意味されているわけでは当然ない。
- 35) ここまでで、意識主観であるところの私の存在意識が「感じ」のような感性系統の表現によって示されていることは筆者の恣意的な操作ではない。カント自身が現に主張している通り、「私の現存在は常にもっぱら感性的なものに留まる *mein Dasein bleibt immer nur sinnlich*」のである (B158 Anm.)。
- 36) Ameriks および Sturma が同じ方向性で議論していたことに関し、両者共に了解の上であったことが以下の箇所から認められる。Cf. Ameriks, 1994, p. 337.; Ameriks, 1995, p. 226.; Dieter Sturma, “Self and Reason: A Nonreductionist Approach to the Reflective and Practical Transitions of Self-Consciousness”, *The Modern Subject: Conceptions of the Self in Classical German Philosophy*, Karl Ameriks and Dieter Sturma eds., University of New York Press, 1995, p. 213, n.10.
- 37) Cf. Ameriks, 1995, p. 225.
- 38) Cf. ibd.; Ameriks, 1994, p. 333f. なお、原文では「I think」となっているが、本稿では表記の統一のため、敢えて「Ich denke」として表記した。ちなみに、Ameriks は「first-level の思惟」を「経験的統覚」として理解しているが、筆者はこの観点については賛同しない。というのは「経験的統覚」は、カントにおいて「内的感官」と同義のものとしてみなされていることから明らかなおおりの、決して「思惟」ではないからである (vgl. A107)。
- 39) Cf. Ameriks, 1995, p. 225f.
- 40) Cf. ibd. この「(self) -consciousness」という概念はカント自身の議論においては登場しないが、カントの議論に則して考えれば、これは個々の諸表象に直接伴うところの「経験的意識」(B133; vgl. A118 Anm.) として解釈される。すると本稿の観点は、「経験的意識」と「統覚」とを同一視しているような印象を与えるかもしれない。確かにカント自身、諸表象に対しては「経験的意識」が伴い、それらは超越論的自己意識の下に帰属するという、あ

たかもそこには二段構造があるかのような語り方をしている。しかしこれに対しては以下のように応じ得よう。すなわち、カントの語り方から察せられるこの二段構造は、あくまでも論理上の問題である。そもそも、「経験的意識が諸表象に伴っているだけ」という段階を考えられるだろうか。経験的意識の伴う諸表象が経験の構成要素たり得る資格を有するのであるとすれば、既にそこには自己意識との連関がなければならないはずである。それゆえ、第一段階として諸表象に経験的意識が伴い、第二段階として経験的意識が超越論的な自己意識の下に帰属するという、分断された段階的な構造が現実的にあるわけではない。この見かけ上の二段構造は以下のような意図からとられていると考えられる。すなわち、明示的な自己意識が常に諸表象に伴う必然性はないという意図である。「統覚」は諸表象に「伴い得なければならない」(vgl. B132) という言い回しによってカントが意図したところは、自己意識が常に諸表象に現実的に伴わなければならない、ということではない。この言い回しには、もし経験が経験として実際に経験主観によって体験されるのであれば、諸表象は自己意識との連関を有しているはずであるという、論理的必然性が含意されているのである。いま示した箇所 (B132) において現に、「統覚」が「諸表象に伴い得なければならない」とするカント自身の記述からも明らかな通り、諸表象に伴う経験的意識と「統覚」としての自己意識とはレベルをまったく異にするのではない。むしろ筆者としては、この経験的意識こそが非明示的な「(自己) 意識」であると考え。それゆえにこそ、経験意識が伴う諸表象には、既にその時点で「私にとっての何か」という性質が付与されるのであり、これこそが「統覚」(すなわち非明示的な自己意識) による諸表象への随伴作用であると考えられる。

(41) Ameriks, 1994, p. 337.

(42) この「事実」に関して Wolfgang Carl はさらに踏み込んだ主張をしている。彼によれば、私が自らの思惟において諸表象を有すと自覚する際、すなわち自分が“何らかの対象を思惟している”ということに関する知を自らもつ際、「私は同時に誰がその諸表象を有しているのかも知っている」のである。無論この思惟対象の所有者が具体的に「誰」であるかということに関しては経験的にしか知り得ない事柄である(すなわち自己認識の領域の問題である)。しかしながら彼が示唆する重要な論点はむしろ、自らの思惟において、その思惟の意識主観であるところの自己自身に関する知が、既に自らに与えられているとする点にある。そしてこの種のいわば直接的な自己知こそが、厳密に言えば、この知の内実であるところ「自己」こそが、「統覚」の作用において意識される自らの存在に関する意識であり、“存在する”として意識されるところの「私」という「指標辞」の内実なのである。Cf. Wolfgang Carl, “Apperception and Spontaneity”, *International Journal of Philosophical Studies* 5th vol. (2), 1997, p. 152f.

(43) Ameriks, 1995, p. 226.

(44) Vgl. Dieter Sturma, *Kant über Selbstbewusstsein : Zum Zusammenhang von Erkenntniskritik und Theorie des Selbstbewusstseins*, G. Olms, Hildesheim, 1985, S. 89-92.

(45) Sturma, 1985, S. 91.

(46) Sturma, 1985, S. 90.

(47) 直前に引用した箇所(註46)の「指標的」の意味はこの点にある。すなわち、通常の意味での客観のように明示的には示されないものの、自らの意識において現に存在すると意識される「おのれ」という感じを指標するニュアンスがこの「指標的」という表現には含まれている。

(48) Sturma, 1985, S. 91. ここにおいて語られる事柄は、外的な客観的基準を介し、自己を「～として」同定することとはまったく異なる。したがって「自己」が誰(何)であるかということは問題にならない。「～として」という形態をとる自己同定においては、誤謬の余地がある。しかしここで語られる「自己確実性」においては、このような自己同定における誤謬の可能性が排除される。ここではむしろ、より根源的な事実として、意識が現にある限り当の意識主観自身に迫りくる生の実感のような事柄が示唆されていると考えられる。

(49) Sturma, 1985, S. 92.

(50) Ebd. [] による補足は引用者による。